

表1 バングラデシュとカンボジアの
貧困削減

国	年	貧困人口比率(%)
バングラデシュ	1995/96年度	47.5
	2000年	44.3
	2005年	40.4
カンボジア	1993/94年度	39.0
	2004年	28.0

(出所) Ministry of Finance (MOF), Bangladesh, *Bangladesh Economic Review 2007*, MOF, 2007; Royal Government of Cambodia, *National Strategic Development Plan 2006-2010*, Phnom Penh, 2005, p. 8.

特集

貧困削減を伴う工業化 — バングラデシュとカンボジアの事例

山形辰史

後発開発途上国において多くの人々は農村に暮らしている。したがって、貧困層も、その多くが農村に住んでいる。そのことから、農村を開発することが貧困削減の王道であると考えられることが多い。しかし近年貧困削減の歩みを速めている後発開発途上国の中には、都市や工業地域での労働集約的工業をその原動力としている場合がある。具体的にはバングラデシュとカンボジアがその例に当たる。これはイースタリー教授が主張した「自由市場を通じた貧困削減」の一例と言える。

● バングラデシュとカンボジア

バングラデシュとカンボジアは後発開発途上国の中でも注目すべき速さで経済成長と貧困削減を進めている。興味深いことは、両国において貧困削減を牽引している象徴的な産業が、共に労働集約的な縫製業（衣類産業）だということである。後述のように、縫製業はバングラデシュやカンボジアの一般の女性労働力に雇用機会を与えることにより、貧困削減に貢献してきた。しかしその貢献はこれまで過小評価されてきた。

以下では、両国の縫製業の貧困削減に対する貢献を分析する。

最初に確認したいのは、両国が世界的に見ても低所得国だということである。

二〇〇五年の一人当たり所得はサハラ以南アフリカ平均が七四五ドルであるのに対して、バングラデシュが四七〇ドル、カンボジアが三八〇ドルである。そんな中にあつて両国は、一定程度の貧困削減を達成してきた。バングラデシュでは、貧困層の全人口に対する比率である貧困人口比率が、一九九五／九六年度に四七・五%であったところ、二〇〇五年には四〇・四%に低下した（表1）。カンボジアでは、一九九三／九四年度には三九・〇%であったのが、二〇〇四年には二八・〇%へと低下している。

この貧困削減の一つの背景が両国の経済成長である。バングラデシュにおいては、一九九三／九四年度から二〇〇五／〇六年度にかけて、おおむね五%程度の安定成長を遂げた。カンボジアでは、二〇〇〇年代初めの平均成長率が約八%であり、二〇〇六年までの三年間については、毎年

二桁の経済成長率を記録している。

● 縫製業の発展と貧困削減

この急速な経済成長と貧困削減の一つの要因と考えられるのが輸出向け縫製業の発展である。まずバングラデシュでは、一九八三／八四年度以来ほぼ一貫して、縫製品輸出が成長を続けている。カンボジアの衣類輸出の成長は、バングラデシュより著しい。結果として両国では、総輸出額の四分の三を衣類が占めるに至っている。

この両国の縫製業の発展の貧困削減に関する効果を分析しようとする際、まず問題になるのが、同産業がどのような雇用機会を人々に与えているのか、ということである。アジア経済研究所の研究チームが、両国の研究機関および業界団体の協力を得て、二〇〇三年に企業調査を実施した。バングラデシュで二二二企業、カンボジアで一六四企業のデータを収集した（詳細は、表2の出所として挙げた文献を参照）。

輸出向け縫製業が両国の貧困削減に与える効果を分析するに際し、第一に注目したいのは賃金である。そもそも縫製業は低賃

表2 バングラデシュとカンボジアの縫製労働者の平均月額賃金

(2003年、米ドル)

職種	経験	バングラデシュ		カンボジア	
		男	女	男	女
縫製工	1年未満	35	34	54	51
	総平均	38	38	59	57
補助工員	1年未満	21	21	45	46
	総平均	23	23	51	50

(出所) 山形辰史「バングラデシュとカンボジア：後発国のグローバル化と貧困層」(山形辰史編『貧困削減戦略再考：生計向上アプローチの可能性』岩波書店、2008年、第3章)。



山形辰史氏

金で知られる業種であるから、貧困層が低賃金で働かされたところでそれが貧困削減に役に立つのかという疑問をしばしば投げかけられる。この問いに答えるために調べたのが、労働者の職種別、経験年数別、性別の賃金である(表2)。ここでは縫製工と補助工員という、縫製工場の中で最も多く雇用されている職種の労働者の賃金を、経営者に対する聞き取りの平均として示している。縫製工はミシンを操作する労働者であり、補助工員はミシンの操作を任せられるほどの経験が無く、材料や半製品の運搬等に従事する。縫製に未経験の労働者が最初に就く職種である。

さて本調査によれば、経験が一年未満の補助工員に対して、バングラデシュの縫製工場は男女問わず月額二ドルを支払っている。この額は、縫製工場が集中するバングラデシュの首都ダカにおいて、貧困層と非貧困層を分ける貧困線より高い。具体的には、食糧だけを計算に入れた食糧貧困線が一三ドルで、食糧以外の必需品も算入した総合貧困線が一八ドルである。カンボジアでは最低賃金が高く設定されていることから、補助工員でさえ四五〜四六ドルの賃金を得ている。カンボジアの貧困線はバングラデシュのそれとほぼ同じである。またこれらの賃金水準は、補助工員にとっての代替的な雇用機会から得られる賃金を上回っていることが、政府による家計所得支出調査結果等との比較から見取れる。さ

らに本研究を含むいくつかの研究結果から、縫製工や補助工員に、教育水準の低い労働者が少なからず含まれていることが知られている。したがって両国において縫製業は、一般の労働者(貧困層に属する)に対し、貧困線を上回り、かついくつかの代替的雇用機会の賃金を上回る収入を与えるという形で、貧困削減に貢献しているのである。

●縫製業への援助と成果主義

次に、近年の国際援助潮流、中でも成果主義と呼ばれる指針と、工業化を通じた貧困削減への支援の関係について述べたい。成果主義とは、目標を体現する適切な指標を作成し、その指標が改善すれば報酬を与え、悪化すれば罰則を科すものである。指標に反映された「成果」が上がれば、それまで通りの仕方での援助を行い、上がらなければ、援助の仕方を再考する、という形で運用される。縫製業の発展を通じた貧困削減を分析する中で私が仮説として得たのは、成果主義の採用が、真に有用なプロジェクトの選択を誤らしてしまう危険性があるという点である。

具体的に言えば、一つの援助機関が独占的な影響力を行使しうるほどに、支援対象の規模が小さい方が、成果主義を適用しやすい。これに対しバングラデシュやカンボジアの輸出向け縫製業は、少なくとも労働者の数という意味では大企業が多い産業である。したがって、縫製業がある援助機関

から支援を受けるとしても、その支援は通常、その企業全体の投入の中の一部に過ぎない。すると、支援を受けた企業が成長したとしても、それをもって、その援助機関による援助が効果を上げたとは主張しにくい。このような背景から、輸出向け縫製業は成果主義にそぐわないセクターであり、それがゆえに援助機関の支援対象とされにくい。対照的に、農村や都市の小規模生産は、その投入の大部分を援助機関が担うことが可能なので、成果主義に馴染む。

バングラデシュとカンボジアの輸出向け縫製業は両国の貧困削減に対して一定程度の効果を上げてきたのであるが、その事実には残念ながら過小評価されてきた。その理由の一つとしては、二〇〇五年初めになされた繊維衣類貿易の自由化に起因する不確実性があったのであるが、それに加え、同産業が現在の国際協力の世界で重視されている成果主義にそぐわなかったことも一因だ、というのが私の主張である。成果主義自体は多くの好ましい結果をもたらしている一方で、成果主義に反対だということも無い。しかし、成果主義の成果指標の不完全性のために、成果の上がりやすいプロジェクトではなくて、成果の示しやすいプロジェクトが援助の対象として選ばれてしまう危険性があることに十分留意しつつ成果主義を用いる必要がある。

(やまがた たつふみ/アジア経済研究所新領域研究センター)